

4. Dukes' B における鋸歯状腺癌の臨床病理学的特徴 (その3報)

病理学 (人体分子)

志田陽介, 藤盛孝博, 市川一仁, 富田茂樹, 井村穰二

第一外科学

菅原 学, 尾形英生, 藤田昌紀, 伊藤友一, 加藤広行

第二外科学

窪田敬一

【目的】右側結腸に多く, 予後が悪い大腸癌として, 鋸歯状腺癌という新しい病理組織型が提唱されている. 今回の検討の目的は, Dukes' B では予後の範囲が広いことから, Dukes' B において鋸歯状腺癌が予後不良因子となりうるかを検討することである.

【方法】64症例の大腸癌手術症例を対象に用いた. 鋸歯状腺癌と非鋸歯状腺癌を分ける診断以外に, 性別, 年齢, 分化度, 深達度, 腫瘍占拠部位, 静脈侵襲, リンパ管侵襲においても比較検討した.

【結果】鋸歯状腺癌は, 症例の17.5% (n=11) に認められた. 鋸歯状腺癌を非鋸歯状腺癌と比較すると明らかに5年生存率は低かった (P=0.0396 logrank, Kaplan-Meier). 統計学的に有意差が認められた項目で, 多変量解析を施行したが, 鋸歯状腺癌は独立因子として認めることができた (P=0.027).

【結論】生存率が有意に低く, 他の因子に影響されないことから, 鋸歯状腺癌を独立した予後因子であると確認できた.

5. 摂食関連物質の分泌に対する腸内細菌叢の役割 —無菌マウスを用いた研究—

実験動物センター

藤平篤志, 今 弘枝, 篠田元扶

【背景】近年の研究から腸内細菌が摂食, エネルギー代謝および肥満に影響を与えることが明らかになってきているが, 腸管由来の摂食関連物質であるペプチドYY (PYY) およびセロトニン (5-HT) に対する腸内細菌叢の役割についての研究報告は少ない. また, 絶食および飽食条件のそれぞれで腸内細菌叢とPYYおよび5-HTの関連性を検討した報告は皆無である. そこで本研究では, 無菌 (GF) およびコンベンショナル (CV) マウスを用いて絶食および飽食条件下でPYYおよび5-HT分泌について検討した.

【方法】12-15週齢のGFおよびCVの成熟雄IQR/Jicマウスを用いて, PYYおよび5-HTの血中濃度および十二指腸組織含有量を定量した. PYYの測定には酵素免疫測定法を, 5-HTの測定には高速液体クロマトグラフィー/電気化学検出法を用いた. サンプルの採取はGFおよびCVマウスともに飽食群と24時間絶食群を用いて行った. 餌は離乳時からGFおよびCVともに同じ放射線滅菌飼料 (オリエンタル酵母社製: CMF) を与えた.

【結果および考察】CVマウスではPYYおよび5-HTの血中濃度は絶食群と比べて飽食群で高い結果となった. 一方, GFマウスでは両物質の血中濃度は絶食群でも飽食群でも同程度に低値を示した. 十二指腸のPYY含有量は絶食条件下では腸内細菌叢の影響を受けることはなかったが, 飽食条件下ではGFマウスに比べてCVマウスで高値を示した. 十二指腸のセロトニン代謝回転率は飽食群および絶食群ともにGFマウスに比べてCVマウスで高値を示した. これらの結果は腸内細菌叢が消化管の内分泌細胞機能を調節し, PYYおよび5-HT分泌を上昇させることを示唆している.